

一駄賃馬口附

但武士方荷物附候共

壱人より貳錢

右之通取立可申事

午〇安永十月

半日閑話初編四渡錢

今春隅田川三圍稻荷開帳にて、大川橋往來多く、三月十五日杯は一日に渡錢三十八貫文有之、十六日には廿貫文の餘有之と淺草菴いせ右衛門かたる

〔傍廂後編〕四大橋

江戸の四大橋はもと三大橋といひて、兩國橋、大橋、永代橋の三なりしを、安永三年に淺草の大川橋出來しより、四大橋となれり、兩國橋のみ本普請にて、外三橋は假橋なれば、請負人の願ひにて橋の雙方に番小屋ありて、武士の外は橋錢二文づゝ、とりしを、文化四年八月、深川八幡祭禮の日に、永代橋落ちて、千餘人溺死したるにより、其時より皆がら本普請となりて、受人なければ、橋錢もとらず、

〔曲亭雜記三上〕深川八幡宮祭禮の日永代橋破落の紀事

永代橋、大橋、新大橋、橋といふま是まで受負人ありて、橋の南北の詰に板壁の小屋を志つらひて、番人二人をり、笊に長き竹の柄を付たるを持て、武士、醫師、出家、神主の外は、橋を渡るものより、一人別に錢二文づゝ、取けり、人の渡らんとするを見れば、併の笊をさし出すに、その人錢を笊に投入れて渡りけり、この故に橋の朽たるも掛更ること速ならず、已むことを得ざるときは、假橋を造りて本普請を延したり、こゝをもてこたびの如き愆ありなどいふものも多かりしにや、當時願人ありて、已來海船江戸入の荷物大小により、一箇に付水揚運上いかばかりづ、取之事を御